

ラオスの こども通信

72号
2018年5月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 若い力に支えられて ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす [2018.2-2018.4] ▶ p.3
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほとり「写」 ▶ p.4

*写真の説明は p.4 をご覧ください。

若い力に支えられて

日本各地の中高生、ラオスの学校に図書室開設で大活躍

「ラオスのこども」の活動は、多くの方々に支えられています。その中にはたくさんの若い人たちもいます。3月から4月にかけて、東京事務所のスタッフは、沖縄、福岡、そして愛知の中学・高校を訪ね、勇気づけられてきました。今号では、中高生のみなさんの温かい力に支えられた活動を紹介합니다。

学園祭で古本市

3月、昭和薬科大学付属高等学校・中学校(沖縄県浦添市)を野口事務局長が訪れました。古本市を最初に開催したのは2008年でした。3年に一度の「りんどう祭」(学園祭)で「本でつながろう」をテーマに古本市を開き、本を必要としている人たちに本を届けたいと、高校中学図書委員会の取り組みが始まったのです。近隣の団体には本を、遠く離れた場所で読書活動を支援している団体には売上金を贈り、その活動を応援してきました。2011年は東日本大震災後の東北の団体に、そして当会は3回寄付をいただいています。

2017年、第4回の古本市は、中学図書委員会が2,000冊を目標に企画を立ち上げました。ポスターを作成し、全校生徒と先生方に呼びかけたのですが、夏休みには900冊しか集まりませんでした。なんとか目標を達成しようと再度呼びかけ、保護者の皆さんにも手紙でお願いしたところ、りんどう祭が迫った9月の中旬には、なんと2,300冊近く集まったのです。



昭和薬科大学付属高等学校・中学校「りんどう祭」の古本市

りんどう祭では多くの方々が本を買ってくれ、中には募金をしてくださる方もいて、ラオスの学校図書室開設に必要な25万円を超える大成功を収めました。中学図書委員長の川畑さんは、

「企画をゼロから立ち上げ、本を集めることはとても大変だったけど、ラオスの子どもたちが本に触れる機会を作ることができて、本当にうれしいです」

と話してくれました。みなさんの頑張りから、ラオスの子どもたちは本を通じて明日を大きく広げることでしょう。



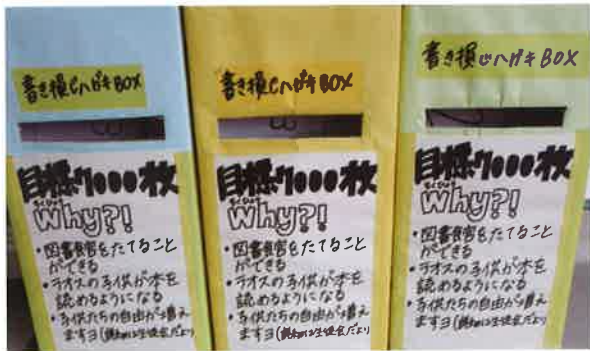
中学図書委員長 川畑さんから寄付目録の贈呈

書き損じはがきの回収活動

足かけ3年をかけて書き損じ・使い残しはがきの回収に協力いただいた愛知県立常滑高等学校には、五十嵐スタッフが4月に訪問しました。きっかけは2015年10月、野口事務局長にラオスの子どもたちの話を聞いた生徒会長(現在は大学2年生)が、書き損じ・使い残しはがきを集めてラオスの学校に図書館を開設しようと提案し、活動が始まりました。生徒会が中心となり、回収ボックスも用意して協力を呼びかけました。

しかし、若い人たちの年賀状離れが進んでいるせいか、思わぬ苦戦を強いられました。そこで、保護者のみなさんや先生方にも協力を呼びかけて3,050枚集めることができました。さらにESS

(英会話クラブ)が学園祭でラオスの小物を販売して、売上を寄付するなど、活動は広がりました。生徒会副会長の小野さんは、「はがきを集めるのに苦労しましたが、呼びかけを広げることで、たくさん集めることができました」とホッとした表情を浮かべて話してくれました。みなさんの熱い思いが、ラオスの子どもたちに本と親しむ機会を提供してくれます。



書き損じはがき回収ボックスが思いをアピールします

国境を超える温かい思い

訪問したスタッフは、ラオスの小学校の教室風景を見せながら、「日本の教室風景と何が違いますか?」と質問します。子どもたちの机の上には教科書もノートもありません。見ている生徒のみなさんの表情には少なからず驚きが見て取れます。学校に図書室があるのは当たり前、教科書や本を持っているのは当たり前。そのような日本の当たり前がラオスには存在しません。「学校に図書室が開設されて初めて教科書以外の本に触れた」というラオスの女子中学生の言葉から、本を読む当たり前をと願って始まった活動が、ラオスの子どもたちの状況を改善することに一役買うことでしょう。



生徒会長の須藤さんから約3,000枚のはがきをいただきました

10年以上も支援活動が続けて



福岡県立香住丘高等学校に代表のチャントソンがお礼の訪問をし、ラオスへの支援活動に熱心に取り組む図書委員の皆さんに感謝の気持ちを伝えました。

ラオスへの支援活動

私たち図書委員会は、ラオスの子どもたちへ絵本を贈る活動を10年以上にわたって続けています。学校に通いたくても通えない子どもや、識字率の低さから本を満足に読めないというのが、ラオスの現状でもあります。「ラオスのこども」という支援団体は、ラオスの子どもたちの教育環境の向上を願い、日本およびラオスにて活動を続けている国際協力NGOの一つです。この団体を通して絵本の寄付と募金をさせていただいています。

今年度も、たくさんの方々が古本市に立ち寄ってくださり、募金活動でも計20,318円もの募金を集めることができました。また、古本市の売り上げ金額との合計金額は44,163円にも及び、今年度も無事、絵本を贈ることができました。集まったお金は絵本を贈るための送料と、ラオスへの寄付金とさせていただきます。

たくさんの御協力ありがとうございました。これからも御協力を宜しくお願い致します。

図書委員の活動が図書館報「あや杉」第27号(平成29年12月11日発行)に紹介されました。

「ラオスのこども冬募金2017」報告とお礼

2017年12月から2月末まで、ラオスのこども冬募金「折り紙で子どもたちの学びを豊かに」を実施しました。多くの方々にご支援・ご協力いただき、62名の方々から492,400円のご寄付をいただきました。心より御礼申し上げます。

今回の冬募金で集まったご寄付は、「子どもセンター」スタッフや小学校教員を対象に実施する「折り紙ワークショップ」開催費用として大切に使用させていただきます。

子どもたちの可能性を広げるために

学校、保護者会、グループ、会社で、古本市の開催や使い残し・書き損じはがきの回収に取り組んでいただけませんか? ご協力を通して、本の出版・配付、そして学校図書室の開設によって、ラオスの子どもたちは、さまざまな可能性を広げていくことができるでしょう。

お問い合わせは事務局 (tel. 03-3755-1603) まで。

学校図書室で紙芝居が好きになって、コンクールに出場。このような発表の場が少ないラオスで、子どもたちの成長の機会の一つです。学校図書室は様々な可能性を秘めています。



ブックフェスティバル、4か所で開催

本と読書についての楽しいイベント「ブックフェスティバル」を、3月から5月にかけて、ラオス4か所で開催しました。

- ・ 3月23日～24日：ヴィエンチャン都国立図書館
のべ40校1,892名参加
- ・ 4月6～7日：ヴィエンチャン県ポンホーン中等学校
のべ25校1,247名参加
- ・ 4月27～28日：ヴィエンチャン県メート郡教育スポーツ局
のべ24校1,256名参加
- ・ 5月4～5日：カムワン県ミタパーブ中等学校
のべ45校2,717名参加



「本のファッションショー」

2006年に首都ヴィエンチャンで第1回のフェスティバル以来、12年間継続しています。近年は地方も積極的で、今年の4か所のうち3か所は初めての開催地です。

ブックフェスティバルの目的は、子どもたちに本や読書に興味をもってもらうこと、学校の先生や保護者が、子どもの教育や発達における読書の重要性を理解すること、学校図書室の担当教員の持続的なネットワークができることです。

2日間のイベントでは、絵本の読み聞かせや、「スーン」というラオスの伝統的な詩の詠唱、本を題材にした演劇や絵画などのコンテンツがおこなわれます。日ごろの活動の成果を披露しようとたくさん子どもたちの応募があります。

コンテストの参加者だけでなく、イベントに来るだけで楽しむこともできます。自由に本を読める場所や、スタッフが紙芝居や絵本を読んでくれたり、絵を描いたり出来る場所もあるので、イベントに来た子どもたちは、それぞれ好きなブースに行き楽しむことができます。

さらに、ステージでは、さまざまな本の紹介がおこなわれます。当会スタッフのアイデアで始まったのが「本のファッションショー」。中学生たちが少し照れながらもモデルのように本を見せながらステージを歩くパフォーマンスは人気があり、盛り上がります。

本の販売もします。ラオスには書店が首都でもほとんどなく、とくに地方では本を購入できる場所がほとんどありません。そこで、どの会場でも大人も子どもも興味を持って集まってきます。

初めて開催された地方で参加した学校教員からは、「図書室の活動をもっとやっていこうと思うので、年1回このようなイベントを

実施して欲しい」とリクエストが寄せられています。また、地方での開催を一緒におこなった県や郡の教育スポーツ局の担当者からは、「このようなイベントを実施するのは初めて。最初はたくさんの活動ができるか心配していた。今回の実施で、学校図書室の重要性を皆が理解してくれたので、さらに活動が広がるだろう。これからは自分たちでこうしたイベントを実施していきたい」と意気込みを語ってくれました。〈支援：Lao Cultural Challenge Fund〉

折り紙ワークショップ 第3弾

大好評の折り紙ワークショップの第3弾をカムワン県で開催しました。2月8日～10日と3月1日～3日、各3日間おこない、合計40名の小学校の先生を対象に、ワークショップをおこないました。

カムワン県での実施は、昨年に引き続き2回目。県教育スポーツ局からの強い要請があり、引き続き実施することになりました。同局が全面協力し、サポートしてくれる県スタッフも継続しています。今後は、県のスタッフが講師を勤められるようにトレーニングすることも検討しています。

「折り紙」というと幼児の遊びと思う人もいるかもしれませんが、折り紙を使って出来る活動の幅は広く、奥深いものです。指先の発達や立体の理解など、さまざまな視点での効果があげられており、近年では研究もすすみ、脳の発達への効果なども注目されています。しかし、そのような効果以上に、自分の手でひとつの作品を完成させることにワクワクするという子どもも少なくありません。

講師を務めるスタッフのチャンシーは、誰よりもその楽しさを知っています。日々の図書館で、子どもたちを相手にプログラムをおこなっているため、子どもたちがどのようなものに興味を示すか、どのような部分が難しいかを熟知しています。そして、その現場の経験で得たテクニックを、丁寧に先生方に伝えていくので、わかりやすいと評判です。



表情は真剣、気持ちはワクワクの先生たち

今回は、図書館活動と連動できるテクニックを新しく取り入れました。折り紙で「あおむし」を作り、絵本と折り紙で「はらぺこあおむし」の読み聞かせをおこなうというプログラムを紹介しました。折り紙で作品を完成させるだけでなく、授業での応用方法など具体的なテクニックを伝えると、他の折り紙作品も、どのように応用できるかといった話題で盛り上がります。ふだんの授業では、教材がそろわず、その活用方法を学ぶ機会も少ないなか、ワークショップを通じて、先生方が自分たちの授業を工夫する手助けになっています。〈支援：キヤノン株式会社〉

「ラオスのこども」の仲間たち

ピーマイ・パーティに感動しました

トック(ボンサマック カンラー)さん/電気通信大学大学院2年生

コンピュータを学びたく日本に留学しました。ラオスでも大学に入りましたが、先生たちも勉強中でしたので、兄・姉も留学した日本を選びました。2011年4月で震災・原発事故のすぐ後でした。来る前は毎日地震があるのかと思っていましたが、そんなことはありませんでした。



その年、「ラオスのこども」のピーマイ・パーティに来て、日本人がラオス人のためにやってくれているのに感動しました。その後のピーマイは後輩を連れてきました。私はヴィエンチャン出身で、ラオスでは知り合う機会がない他の地方やモン族の友だちができました。

日本のいいところは技術力と安全なこと、礼儀正しくて子どもちゃんと並びます。でも日本はやる事が多くて、忙しい。ラオスの良さは、ゆっくりできること。それと、ラオス人は言いたいことは素直に言います。悪気がなければ、大丈夫。日本人は人に合わせて行動して遠慮したり、交渉をしてはいけないとか、失敗を心配したりするように感じます。東南アジアの人は、自分が正しいと思ったら、すぐに言いますよ。日本のみなさん、失敗しても大丈夫。できなくて、もともとです。ポーベンニャン(ノープロブレム)。

卒業後は情報系の日本企業に勤めたいと思っています。ボランティアとしては、ラオスと日本を繋ぐことをやりたいです。

表紙の写真

2017年の年末から年明けにかけてラオス南部のチャンパサクに行き、宿泊したゲストハウスの裏、メコン川沿いで初日の出の少し前に撮り、とても美しかった。と話す、早大学生団体スーンの石川由里絵さん。ラオスのこどものピーマイ・パーティでの「みんなに伝えたいラオスの写真」でいちばんの人気でした。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 72号

2018年5月発行 編集人:森透
発行: Action with Lao Children / DeknoyLao
(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603
e-mail: alctk@deknoylao.net
<http://deknoylao.net>
都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494

メコンのほとり写

見つけた、撮った、感じた

4月15日、恒例のラオスのお正月「ピーマイ・パーティ2018」を東京・大田区の池上会館で開催しました。その中で、ラオスを「新発見」「再発見」する輪を作りたい、とインターンが中心になって企画したのが「みんなに伝えたいラオスの写真」。様々なラオスの表情が寄せられました。



「何見てるのよ。一生懸命なんだから」 撮影:新藤雅章さん



別れ際、ぶつぶつ言いながら手首に巻いてくれるおばあちゃん。「無事におうちに帰れますように」と言ってくれているんだらう。コブチャイライライ!おばあちゃんも元気でね。
撮影:諏訪小百合さん

クラスター爆弾の子爆弾が飛び散った瞬間の展示。不発弾は今も爆発して人々を苦しめます。(ヴィエンチャン、COPEビジターセンター)
撮影:塩谷光さん

